

序文 — 『年報』第16号の発刊にあたって—

乙 政 正 太 (関西大学)

なかなか予定通りという訳にはいきませんが、『年報 経営ディスクロージャー研究』(以下、『年報』) 第16号を発刊することができました。少しは本誌が年報としての役割を取り戻すことができるものになってきたと思っております。会員、学生会員、および賛助会員の皆さまのご協力にこの場を借りてお礼申し上げます。

今号では、特集(1)に、2016年5月に東京経営短期大学で開催された第13回研究大会での特別プロジェクトの最終報告を掲載しています。特別プロジェクトの最終成果としては、学会誌の論文掲載または市販本の発刊が義務となっています。本号では、2つの委員会から合計3本の論文が提出されました。特集(2)では同大学で開催された統一論題「現代社会におけるディスクロージャーの役割」を、特集(3)では2016年12月18日に大阪市立大学で開催された第14回研究大会での統一論題「経営者予想とディスクロージャー」をそれぞれ取り上げています。各報告の内容については当日会場で配布された要旨と後日編集委員会に提出して頂いた要旨の原稿を掲載しています。各研究大会でどのような議論がなされたのかについて様子をお届けできればと思っております。

また、「論稿」セクションには、3つの論文が掲載されています。いずれも各研究大会において自由論題報告が行われたものです。『年報』では今号から査読は実施せず原則としてすべて掲載するように投稿規程が改訂されています。したがって、投稿された論文はすべて査読プロセスを経ることなく掲載したものになります。なお、投稿された論文のなかには『年報』の投稿規定を見過ごしているケースが見受けられました。投稿を予定されている方は投稿規定 (<http://www.jardis.org/publications/jbd/contribution.html>) をチェックしてから提出のほどよろしくお願い申し上げます。

さらに、「その他」の区分では、編集委員会において執筆依頼をした原稿(研究ノート)を掲載しています。これは会員の情報交換の場を提供することを目的としています。今号では、現在価値恒等式に関する研究のサーベイであります。椎葉 淳氏(大阪大学)にご寄稿いただきました。企業価値評価の新たな方向性について会計研究の領域を広げることに寄与するものと思われる。具体的な数値例を使用したケースについては次号に掲載する予定にしています。

最後に、次号『年報』第17号においても、発行スケジュールの正常化を維持できるよう努力してまいります。会員の皆さまも奮って学会報告等をしたうえで投稿していただければ願っています。